

宮沢賢治「精神歌」の心

「まこと」を求めて「ひかり」の道を

黒澤勉

(岩手医科大学 教養部 文学)

はじめに

佐藤泰平は、宮沢賢治が作詞作曲した曲として「剣舞の歌」「牧歌」「星めぐりの歌」「月夜のでんしんばしら」「イギリス海岸の歌」「大菩薩峠の歌」「太陽マヂックの歌」の八曲を挙げている。

本稿のテーマである「精神歌」は賢治の作詞に賢治以外の人が作曲した曲で、校歌として誕生したものである。「精神歌」と命名したのは賢治自身であった。

校歌には普通、その土地の山や川、その土地にちなむ人名などの固有名詞が使われるものだが、この「精神歌」にはそれがない。特定の学校の校歌というより、賢治自身の理想、その生き方や文学的特徴も現れているから、賢治を愛好する人は親しみをこめて歌うことが出来る。

校歌のない学校はおそらくないのであろう。どの学校も校歌を持ち、入学式や卒業式、その他、大切な行事、式典などのある場合に必ず歌われるのが校歌である。同じ歌を歌うことによって、同じ理想に向かう同志としての絆を深める。校歌は学校という共同体の歌である。賢治がこうした共同体の歌を作ったというのは、その文学活動と無縁な余技ではなかった。端的に言えば賢治の文学は共同体の文学としての性質を持っている。共に歌い、共に演じ、共に生きようとする、そうした働き、促し

が賢治文学の特質の一つと言える。それは賢治が職業的な作家、原稿料によって生活する作家でなく、生活者(働く人)として書き続けたことと関係がある。教師として、また教職を辞した後では、農民として身近に生活する人々と共に生きようとする理想がその文学の一つの性格を形作っている。

本稿ではこの共同体の歌である「精神歌」を取り上げ、その作られた背景、幾分難解なその歌詞について解説してみたい。

教育者としての賢治についてその実践を取り上げている本は数点(末尾に紹介)あり、それを見ると、いかに賢治がすぐれた教師であったかが知られる。しかし、いずれの本も「精神歌」について詳しく書かれていないとはいえない。ここではそれを補うべく詩の方面から教育者賢治の理想を掘り下げてみたい。

一 農学校教師「宮澤先生」の誕生

賢治が稗貫郡立稗貫農学校教諭となったのは大正十(1921)年十二月、二十五歳の時であった。同校はこの年四月、農学校として開校したばかりで、その前身は「蚕業講習所」(明治四十年五月開所)である。

開校するに当たって、新入生として四十名を募集、講習所に在籍して

宮沢賢治「精神歌」の心 — 「まこと」を求めて「ひかり」の道を

いた生徒十七名は二年生としてそのまま在籍した。畠山栄一郎校長のもとに四名の教諭（堀籠文之進、白藤慈秀、奥寺五郎、阿部繁、岩崎三男治）それに助手の小川慶治、剣道指導者として照井謙二郎の合わせて七名が指導に当たった。

ところが開校後間もなく、岩崎教諭が兵士として入営することになったため、新たに教師が求められていた。そこに候補として賢治の名が浮かんできたのである。畠山校長は白藤慈秀に賢治について「寒中に花巻の町をお題目を唱えて歩いているというので、変な噂が流れているが、どう思うか」と尋ねた。白藤は「学力も人徳も高くこの学校の最適任者です」と答えたという。

賢治側の事情はどうであったか。賢治は大正十年一月、父、政次郎に日蓮宗への改宗を迫って対立（宮澤家、また政次郎は浄土真宗の篤信家であった）激しい論争の末、家出も同様、突然上京した。本郷にあった国柱会の奉仕活動しながら、文信社という小さな出版社で校正係、ガリ版切りなどをして生計を立てていた。国柱会は田中智学の組織した在家の日蓮宗の信仰団体で、賢治はこの田中智学の著書を反復熟読、その会員になっていたのである。友人、保阪嘉内宛書簡に「今度私は国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです」（大正九年十二月二日付け）と書くような傾倒、心酔ぶりであった。

家出した賢治のもとに家族が心配して送金した。しかし、賢治はこれを送り返し、水とジャガ芋の極貧的な生活を送りながら、燃えるような思いで創作に励んだという。国柱会の高知尾智燿と会って、文芸の創作を通して法華経の心を伝えるのも、一つの行き方だと諭されたことから大きな啓示を受けたのがきっかけであった。

突然の家出は無謀ともいえる宗教的な決断だったが、この時の東京生活によって賢治は自らの人生の使命、課題をつかんだ。後年、病に倒れて己が人生を振り返って、その手帖に、この時の出会いについて「高知

尾師ノ奨メニヨリ法華文学ノ創作 名ヲ求メズ 貢高ノ心ヲ離レテ」と記しているのは、「文学者」賢治の出発点がどこにあったかを示す言葉である。半ば趣味的、個人的で、せいぜい仲間内の短歌や童話の創作から、多くの人々に読まれることを目指しての本格的な創作活動を始めるに至ったのは、この高知尾智燿との出会いが決定的であった。「私は書いたものを売らうと折角しています。それは不真面目だとか真面目だとか云ってくださるな」「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です」（大正十年七月十三日付け関徳弥宛書簡）と書簡にあるのは、文学者として生きようとする意欲を興奮をもって語ったものである。最初から「貢高ノ心ヲ離レ」ていたわけではなく、作品を売ろうとしていたこと、宗教的な文学を目指していたことも書簡によって知られる。

ところが八月中旬、妹のトシが喀血、「スグカエレ」の電報を受けて急遽帰郷することになった。そこにはもちろん妹への愛情もあったであろうが、そればかりでなく、東京での生活に経済的、あるいは精神的な行き詰まりがあったと思われる。詳述は別な機会に譲るとして、恐らく、東京にあって、創作していくことの困難もあったものと推測される。

帰郷した賢治は、妹の看病をしながら、岩手を拠点とした童話を次々と書いていく。郷土こそ、その文学の源泉であった。それは東京での生活を経て発見された郷土の発見であった。

創作に熱中していた賢治に稗貫農学校の畠山校長から声がかかった。畠山校長も賢治と同じ盛岡高等農林学校の卒業生であり、せっかく、高等農林を卒業した賢治がそれを生かさずに生活しているのはもったいない、是非、と勧めた。賢治ははじめ「私は教師に向かない」と言って固辞したが畠山校長が賢治の尊敬する盛岡高等農林学校の恩師関豊太郎教授に堂々と反論したことを聞き、それ位の校長先生のおられるところならと承諾した。父は賢治が定職についていないことを幾度も批判、不満に思っていたので強く勧めた。賢治が童話を書いているのは知っていたが、堅実な商人であった政次郎にしてみれば、これを支援するなどと言

うことは考えられなかったのである。今でこそ賢治の童話は世界的な評価を得ているものの、周囲の理解や支援があったわけではない。

以上のようなわけで、賢治が教師になったのは、自ら志願してのことではなく、たまたま稗貫農学校の岩崎教諭が入営して学校に欠員が生じたこと、賢治が家出を切り上げて帰郷したことという偶然が重なったことによるものであった。

しかし、教育という仕事は賢治の資質に最も叶った仕事であった。賢治には教育者としての豊かな資質があった。専門の農業についての科学的な知識はもちろんのこと、音楽、文学、宗教、植物学、天文学、地質学など並はずれた豊かな教養があり、しかも、心温かいユーモア溢れる人柄は多くの青年を惹きつけた。賢治が教師としてどれほど魅力的な存在であったかは、その教え子達による多くの証言によって明かである。

上京中に決意した創作に目を向けてみると童話集『注文の多い料理店』所収の作品は、そのすべてが八月中旬に帰郷してからのものであり、深い郷土愛に根ざした作品ばかりである。『注文の多い料理店』には九編の童話が収められており、そのうち最初に書かれたのは『柏ばやし』の夜』で八月二十日、花巻に帰郷してからの作品と推定される。十二月に、農学校教師として勤務するようになってからも次々に作品が書かれた。また、自ら「心象スケッチ」と呼ぶ詩作品が書かれるようになったのは、翌年一月になってからである。教師としての生活が始まる中で童話や詩の創作が展開し、教師としてまた文学者として大きく成長していくのである。

教育活動と文芸の創作はそれぞれ、別な営みであるが、賢治の場合、教師としての体験がその文学を教育的なものとした、という側面もある。「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません」（『注文の多い料理店』序）という言葉は、教育者としての体験なしで生まれたとは考えにくい。賢治の童話は「ほんたうの

たべもの」別な言葉で言えば、精神的な糧、豊かさめざして書かれたものだった。

また『イーハトーボ農学校の春』や『或農学校生徒の日記』などという農学校の教師生活の体験がそのまま反映した作品もある。『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』なども学校、教室が重要な舞台となっている。

また、その詩の中には教え子も登場する。生徒達に向けて書かれた作品もある。教師とならなければ『春と修羅』の詩編は生まれなかっただろう。教師としての生活や精神の安定が童話や詩を生みだし、その作品にも影響を及ぼしている、と言えそうである。

上京する前の賢治は、その書簡に伺われるように、自閉的、鬱的ともいえるような、社会とつながりをもてない信仰心の過熱を生きていた。それが社会と、人間とつながる職業を見いだした喜びは大きかった。語るべき相手として少年、あるいは青年を発見したのである。『注文の多い料理店』の広告チラシの中で「それは少年少女期の終わり頃からアドレッセンス中葉に対する一つの文学としての形式をとっている」と書いている、その読者層と日々、生きることが出来たという意味でも農学校教師としての生活は意味があった。

農学校教師として、賢治の担当した教科は化学、数学（代数）、英語、土壌、肥料、それに農業実習として、水田稲作を受け持った。しかし、その教育者としての活動は教科指導にとどまらなかった。生徒達と共に岩手山に登ったり、北上川で泳いだりした野外活動。クラシックレコードの鑑賞会。自ら脚本を書いて上演させた演劇などの文化活動。精神歌の作詞もそうした学校という共同体における活動の中の一つであった。

農学校の隣には県立花巻女学校があり、堂々たる建物であったが、農学校は教室一つ、草葺き屋根の蚕室二棟、事務室と職員室は同じ部屋、それに使丁室、宿直室という質素なもので「桑っこ大学」と呼ばれていたという。そのささやかな学校で繰り広げられた自由で伸びやかな教育を支えていたのは校長の個性であったようだ。畠山校長は賢治を深く信

頼っていた。校長は闊達で明朗、たいていのことは先生達のしたい放題で、職員会議などと改まったことをやるまでもなく、劇であろうが、音楽会であろうが賢治の自由にまかせたという。それだけ賢治に信頼を寄せていた、ということでもある。賢治がそのもてる才能を遺憾なく發揮し、教師として縦横無尽ともいえるような活動が出来たのも、その背景として、こうした校長がいたこと、小規模校における自由な校風があったからである。

賢治が農学校教師として勤務したのは大正十年一月一日から大正十五年三月三十一日までの四年四ヶ月のことで、この間、校名は大正十二年四月、稗貫郡立稗貫農学校から岩手県立花巻農学校に変わった。

二 「精神歌」の誕生・その後

大正十一年の二月頃（教師としてまだ三ヶ月の頃）、賢治は稗貫農学校生徒たちの精神的な一体化を進めたいという気持ちから、全校で歌うための歌詞を作り、同僚の堀籠文之進に見せ、誰かに作曲してもらいたいのだが、と相談した。そこで堀籠は盛岡高等農林学校の友人であった川村悟郎を紹介した。川村は賢治と小学校（花巻尋常高等小学校）の同級生で、盛岡高等農林では後輩にあたる。バイオリンの演奏が巧みで、祖母が花巻に住んでいたこともあって、農学校にもよく訪れていた。賢治の依頼を聞いた川村は喜んでそれを引き受け、作曲して楽譜を持参した。それをもとに賢治と川村が相談しながら完成させた。賢治も音楽、歌になみなみならぬ関心を抱いていたから、ただ作曲を依頼してそれに従うというのではなかった。それに川村も専門の作曲者ではない素人である。賢治とてまだ詩を作り始めたばかりの、これまた素人であった。

素人と文人の違いは何か。その区別は難しいが、もし文人とは芸術によつて経済的に独立している人、と考えるなら、賢治はあれほどのすぐれた作品を残しながらついに生涯「素人芸術家」であった。賢治自身も後に専門化され、商品化された芸術を批判し、農民自らが創作者たれと

主張している。（『農民芸術概論綱要』）もし、賢治の作品が最初から今のようによく評価され、賢治が原稿で生活する詩人、童話作家になつていたら、こうした主張は生まれなかつただろう。賢治が文学者として恵まれなかつたということは、賢治文学の成熟にとってかえって、幸せなことであつた。

それはともあれ、歌はそうして二人の若い素人の手によつて完成した。それを校長に紹介した。校長はその歌を聞いて、いい歌だから校歌にしたい、と言つた。しかし、賢治は卒業式やいろいろな式に歌うのではないからといつて遠慮した。生徒達は喜んで歌い、学校の雰囲気は見違えるほど明るくなったという。当時、賢治の指導を受けてこの歌を盛岡中学校の生徒であつた森庄巳池は県下の中学校の競技大会が花巻であつた時、この歌を耳にしてびっくりした、と書いている。

後年の話になるが、宮澤清六によると、農学校の生徒達が花巻の町を行進した時、病床に臥していた賢治の耳にその歌が聞こえて喜んでゐたという。しかし、やがて軍国主義の高まりの中で、「精神歌」は歌われなくなり、土井晩翠作詞の新たな校歌が作られた。賢治は新しい校歌が作られたことを聞くと、「あれは笑止（＝恥ずかしい）なものばかりだつたなあ」と語つたという（『思ひ出』）。昭和八年、軍国主義の風潮の高まりゆく中で、病床に臥していた賢治は若き日の歌を聞いてどう感じたであろうか。また、時代の動きをどう感じていただろうか。「精神歌」はある意味で大正自由主義が地方にもたらした余波の産物ともいえる。やがて学校演劇も禁止となり学校教育も、国家主義の風潮にからめとられていくのである。

「精神歌」は、賢治の文学が日本中の人々に愛され、その生き方に熱い共感の聲が高まる中で、あらたに賢治の「精神歌」として今や単に一つの学校の歌に留まらず多くの人に愛唱される歌となつてゐる。賢治文学が世界的に評価されていることを思えば、やがては世界中の人に愛される歌になるかもしれない。

少し先回りした記述になってしまったが、この「精神歌」の原稿がどのような形で今に残されているか紹介しておこう。

「精神歌」の最も古い原稿は平成八年になって、第三回卒業生の杉山芳松の遺品の中から「稗貫農学校精神歌」という形で楽譜付きで発見された。謄写版で印刷され、歌唱のために印刷されたものである。

大正一二年五月二五日、同校は「岩手県立花巻農学校」として、開校式を行った。その開校式にも歌われ、「岩手県立花巻農学校一覽表」の中に、「花巻農学校精神歌」として印刷されている。これが長い間「精神歌」として知られていたものである。

一方、この「精神歌」は、「天業民報」第八四五号（大正一二年七月三日付け）に「花巻農学校精神歌」として紹介されていたことも判明した。「天業民報」は国柱会の機関新聞で、賢治はこれを重視し、人にも一読を勧めていた。宮澤友二郎あて書簡に「願はくは世界の光栄地球の大燈明台たる天業民報をばご覧下さい」（大正十年、二月十九日付け）と書き、宮本友一にも「差し当たり一番重要なのが天業民報でせう」（大正十年三月十日）と書いている。おそらく賢治が最も信仰を勧めていた保阪嘉内にも「赤い経巻」（賢治所蔵の法華経）だけでなく、これを送っていた可能性もある。その「天業民報」に投稿したわけで、同紙には「春と修羅」所収の「青い槍の葉」それに「黎明行進歌」も掲載されている。「黎明行進歌」には、副題として括弧書きして（花巻農学校精神歌）と添えられて掲載されている。（「青い槍の葉」も本来、農学校の生徒達のために、歌われるものとして作られたと考えられる。）

国柱会の高知尾智燿は「初夏の花巻より」と題して、「天業民報」に紹介するに際して次のような一文を添えている。

「岩手県花巻農学校に教鞭をとっている報友（注、「天業民報」の愛読者）宮沢君から学生歌数章を送られた。これは同校で学生諸君が若い声で歌って居るのだそうである。同君が学課の授業の外に学生を精神的に指導してゐる努力が偲ばれてゆかしく思ふ。因みに同君の令妹は女子大

学を卒業後花巻高等女学校教諭をしてゐた若き日蓮主義者であったが惜しい哉先頃病没され、遺言によって三保へ納骨した。詩操に豊かな宮澤君！唱題中に瞋目された御令妹の為にも歌ってあげて下さい」

「稗貫農学校精神歌」は楽譜付きで、漢字片仮名表記になっているが、「花巻農学校精神歌」は詩としての読みも考慮して平仮名、漢字表記で「天業民報」に発表されたものと同じ形になっている。本稿では一編の詩としてこれを考察する所から、後者の表記を使って解説していきたい。

三 「精神歌」解説

「精神歌」は全体で四連からなる七五調の文語定型詩で、四連のいずれも「日は君臨し」という言葉で始まっている。その内容として、第一連で種播くこと、第二連で汗して働くこと、第三連で学ぶこと、第四連で人生を歩むことを取り上げている。

主題は「太陽の光を浴びて土に生きる我らは、まことを求め、自ら輝く光となって歩もう」と、まとめることが出来ようか。「まこと」は自分の心に根ざすもの、「ひかり」の根源は太陽であり、太陽から降り注ぐものである。

「太陽」「まこと」「ひかり」……いずれも賢治作品のキーワードとも言ふべき大切な言葉で、この詩はまさに「賢治の詩」であって他のだれの作品でもない個性の刻印を帯びている。

その特徴として次のようなことが挙げられよう。

- ① 賢治独自の宇宙感覚、自然信仰的な感覚が見られる。
- ② これまた賢治独特の洒落た表現、ユーモア感覚が見られる。
- ③ 校歌にありがちな、その学校の環境、山や川、先人や歴史的な故事などの紹介は一切ない。

④ 「まこと」という日本の伝統的な価値観を受けつぎながらもそれを賢治独自の「ひかり」の感覚と結びつけている。

⑤ 農業という労働が「まこと」を求めて生きる求道的な精神と結びつ

いている。ここに「農に生きる求道者」賢治の理想が歌われている。聖なる自然のもとで、深い信仰をもって働くという意味では、ピューリタンのともいえる。

精神歌は賢治の文語詩がそうであるように、極めて圧縮された、密度の濃い詩である。簡潔でありながら、それゆえにかえって理解しがたい点もある。また農学校で歌われる歌だということにぬきにしては理解できないところもある。以下、この「精神歌」について具体的に解釈、解説してみよう。

(一)

日は君臨しかがやきは

白金のあめそそぎたり。

われらは黒き土に俯し

まことの草のたね播けり

(語釈)

○君臨……君主としてその国を統治していることだが、ここでは太陽を擬人化して太陽系宇宙の中心にあって、その要として、太陽系惑星を統べるように輝いていることをいったものである。賢治は天皇制などというものはいつか滅びる、この世で一番偉いのは太陽だ、と教え子に語ったという。「自我の意識は社会、宇宙と進化する」と書いた賢治は、個を越え、国家や社会を越える大いなる宇宙意識を心に抱いて生きた詩人だった。

○白金……プラチナ。銀白色の鮮明な光沢をもつ重金属。賢治は煙や雨のイメージとしてよくこの金属を使った。例えば、雲を喻えて「海綿白金（「プラチナスポンジ」とルビを施している）」（詩「小岩井農場」）とか「白金属の処女性」（詩「ちぢれ

すがしい雲の朝」と呼んでいる。「白金の雨」を太陽の光の比喩と解釈する説もあるが、文字通り日をあびて白金のように輝く雨、きらきらと輝く日照り雨を言ったものである。

『十力の金剛石』では日に輝く雨粒を「トパーズ」と表現している。また『春と修羅 第二集』には「日はトパーズのかげらをそそぎ」と書いている。「白金」は一般には「はつきん」と読まれ歌われているが、賢治は「はくきん」と読み歌っていたから、それに従って「はくきん」と読み、歌うべきだと賢治の教え子達（照井謙二郎、長坂俊雄、沢里武治、瀬川哲男）は述べている。「花巻農学校精神歌」の楽譜にも「はくきん」と記されており、首肯すべき指摘と思われる。

○黒き土……賢治の教え子であった瀬川哲男は、普通の土壌に充分の堆肥と厩肥を入れて耕した肥えた土ということである、と書いているが、賢治と共に農作業をした人ならではのゆき届いた解釈である。

○まこと……賢治作品のキーワードの一つで、全作品、書簡を通して使用頻度は六十回を越えるという。「まこと」は和語で「ま」と「こと」と分析され、真実の言葉、真実の事、という意味である。言葉の真実性、真実の誠意ある行為を大切にしようとする伝統的な価値観があり、賢治もそれを継承している。賢治作品では「まことのひかり」「まことのちから」「まことのみち」（『めくらぶだうと虹』）などという使用例もあるが、ここでは農学校の校歌にふさわしく「まことの草のたね」と、穀物や野菜の種を植え、育てる農業と結びつけて表現した。

(解説的口語訳)

この太陽系宇宙にあって太陽は王者のごとく輝き、君臨しています。その日差しを浴びて、雨は白金のように、きらきらと地上に降り注ぎま

す。太陽と雨の恵みを受けて、私達は黒い土に俯すようにして働くのです。私達が播くのは、単に穀物、野菜の種ではありません。「まことの種」を播き、まことの心も育てていくのです。

(解説)

「精神歌」の冒頭で賢治はまず、太陽を取り上げている。しかも、それは四連まで「日は君臨し」と繰り返される。農学校の校歌だから、自然の中で働く姿を取り上げて歌うのは特別な事でないが、この太陽に対する感覚は賢治独特のものであることに注意したい。

「太陽は君臨する」……言われてみれば確かにその通りである。太陽はこの地球に光と熱をもたらす。太陽なくしてこの地上に光と熱はないし、地上の命もない。生きているのは太陽のおかげである。夜や昼があるのは太陽の光によるし、季節があるのも、太陽のためである。地球は太陽の周りを自転しながら、一年かけて公転している。地球が太陽の周りを自転することによって、夜と昼、一日の変化がもたらされ、同じく、太陽の周りを一年かけて公転することによって季節の変化が生み出される。そんな知識は誰もが持っているながら、太陽を「感じて」いるかといえば、そういう体験は少ないであろう。しばしば山に登り、野宿もし、夕焼けや夜明けの太陽、昼時の太陽を仰いだ賢治は太陽を豊かに感じ取る感性の鋭い詩人だった。賢治にとって、非情なる太陽も人間と同じように感情を持ち、語り合える相手であった。それは童心とも言えるし、原始的なアニミズム感覚とも言えよう。でありながら、それは科学と矛盾しなかった。それどころか太陽や月、岩石や星、地史についての科学的な知識や体験が、その想像力を広げ、感じ取る心を豊かにした。「君臨」とはありふれた比喩でなく、賢治の太陽体験を凝縮した詩人的な感性に基づく言葉である。

賢治作品には多くの天文用語が登場するがその中で一番使われているのが太陽である。その太陽を賢治は様々な言い方で表現している。

宮沢賢治「精神歌」の心——「まこと」を求めて「ひかり」の道を

例えば『二十六夜』では、「日天子」と呼ぶ。「日天子」は梵語の「スリヤ」の漢訳で太陽を人格化した言葉である。賢治は仏教の太陽に対する感覚を学んでいる。また『イーハトーボ農学校の春』という作品の中では、太陽を「光炎菩薩」と呼び「太陽マジック」とも呼んでいる。太陽は光と炎の源であり、命を育む神秘的にして、不可思議な、慈悲深い存在だと表現しているのである。「君臨」といっても、非情な冷酷、横暴な支配ではない。生命を育む温かい存在である。「お日様が笑ってみえますよ」とか「どこへ行ったって空はお日様の光でいっぱいです」(「おきな草」)とその童話に記してもいるように、私達を見守り、包んでくれる「菩薩」なのである。

太陽を「君臨」するもの、あわれみをもってなべてのものを見つめる存在だと捉えることは、その支配のもとに、ささやかな存在として人間を眺めることにもつながる。それは素朴ながら謙虚な宗教的な心の始まりである。どの民族においても、原始時代、太陽は神として崇拜されていた。日本でも天照大神は太陽の人格化したものである。人間中心の思想、科学の発達はそうした素朴な信仰を愚かなものと笑うかもしれない。しかし、太陽が、また自然が人間より大なる存在であることは確かであろう。人間も自然によって生み出されたものであって、自然を乗り越えることのできない存在である。

童話『鹿おどりのはじまり』は、鹿達の歌や踊りを通して太陽に対する感謝、太陽の恵みのもとに生きる喜びを表現した作品であり、「太陽への賛美歌」ともいえる。

環境問題は二十一世紀の大きな問題であり、自然との共生が叫ばれている。しかし、自然と豊かに交流する、豊かな自然体験を持つこと、自然に感動し、自然を賛美する心がなければ空しく、狭い人間中心主義の利己的な主張になってしまうであろう。

太陽の恵みと共に、雨の存在も穀物を育てるうえで大きい。太陽と雨、その恵みによって穀物は育つ。しかもそれは神仏の恵みのような無償の

恵みである。賢治は自然の恵みを意識し、感謝することを通してそうした目に見えないものの存在に気づかせようとしているようにもみえる。賢治のいう「法華文学」とは、狭いセクト的、排他的な宗教ではなく、宇宙万物を包む包容力があるともいえるようか。

太陽の光を浴びて、雨がまた光となる。輝く雨は一人ひとりの存在でもある。「まづもろともに輝く宇宙の微塵となりて無方のそらにちらばらう」(『農民芸術概論綱要』)と賢治は後に書いている。『法華経』の「如来神力品」によると、仏は全身の毛穴から光を放ち、諸々の「幽冥」(闇)を照らし出したという。聖書においても、キリストは光の子とされ、信仰の道は、「光の道」といわれる。賢治はキリスト教からも学んでいることは『めくらぶだうと虹』において、明かである。その中に「まこと光」という言葉が出てくる。修羅の「闇」に対して、叡智に満ちた神、仏が「光」である。その光を受けて我らも「光の子」として生きる。そこに「まこと」がある。「まこと」とは、「光炎菩薩太陽」の影響を受けて、自らも光り輝くものとなること、すなわち、菩薩のような存在になることである。しかもそれは現実社会から遊離した「菩薩」ではなく、野外にあつて、敬虔に、慎ましく働くことである。働くことを喜びとして、皆で力を合わせて労働することである。勤勉にして謙虚な、働くものの心が「まこと」である。賢治は「まこと」という日本的なモラルを自然交感の喜びと結びつけた「宇宙意識をもつモラリスト」であり「農に生きるモラリスト」であった。

(一)

日は君臨し 穹窿に

みなぎり巨る青びかり。

光の汗を感じれば

気圏のきわみ隈もなし。

(語釈)

○穹窿(きゅうりゅう)……「大空」。「穹」は弓形に中央の高く盛り上がった空、「窿」も同じく、盛り上がった空で、大空を丸い天上(ドーム)として把握したもの。プラネタリウムもこの発想に拠るものである。『星と月は天の穴』とは吉行淳之介の小説の題であるが、昔は、ドーム(丸天井)の穴から外の世界の光が漏れているのが星の光と考えられた。賢治は既(うまや)の屋根を内側から見て「大伽藍(カテドラル)の穹窿のやうに一本の光の棒がさしている」(詩「北上山地の春」)とも書いている。また空のことを「天の椀」(詩「春と修羅」)「天の海」(詩「雲とはんのみき」)「蒼穹」(詩「峠」)「海蒼い天」(詩「二本木野」)などと表現している。

○青びかり……瀬川哲男によれば「太陽系全体の生物の発する青い光、即ち修羅などのたくさん発する悪い光」を指しているというが、大空にみなぎり「巨る」(「巨」はぐるりと巡る、という意味で丸天井のような空を巡るイメージを喚起させる)「青びかり」とは具体的にいえば、稲妻と考えられる。稲妻は賢治の連想によると、恐竜たちの跋扈する修羅の世界を暗示し、人間の無意識の底に潜む原始的な本能、利己主義、闘争本能といったものを象徴すると考えられる。詩「小岩井農場」の中でも、「いま日を横ぎる黒雲は侏羅や白亜のまっ暗な森林もなか爬虫がけはしく齒をならして飛ぶ。その氾濫の水けむりからのぼったのだ」(「パート四」)と書いている。

○気圏……賢治の愛用語の一つ。地球を包む大気の占める全領域。「まばゆい気圏」(詩「春と修羅」)という言葉が示すように、賢治はこれを「まばゆい」ものとして把握している。この歌詞でも「気圏のきわみ隈もなし」と、一点のかけりもないものとして捉えている。それは実際に明るく輝く空というより、象

徹的な「輝かしい」もの、もつといえ「聖なる世界」を暗示しているようにも思われる。

(解説的口語訳)

太陽はこの宇宙にあつて神のごとく君臨しています。天球として広がる青空を見上げると、黒雲が浮かんで、一瞬稲妻が走ります。それは弱肉強食の恐竜の時代、修羅の支配する時代を思わせます。私達の心の内にもそのように、無意識の底に眠る修羅の意識が吹き出す時があります。しかし、私達が日の光を浴びて、汗して働く時、その汗も光となって輝きます。その時、内なる修羅は追放され、この大気圏の果てまで一点のかけりもない輝ける地となり、人類の幸福も実現されるのです。

(解説)

賢治の自然把握は独創的である。空は単なる空でなく、「椀」であつたり、「海」であつたり、「海蒼の天」であつたりする。その感覚の鋭さは生来のものであろうが、豊かな自然体験、山野の跋涉体験があつての事でもあろう。

しかも、それは空間的な大きさをいうばかりでなく、時間的にもはるか人類誕生以前の過去や死後の永遠の未来に向かった。閃く閃光のような稲妻に、賢治はこの地球の進化を瞬時にして夢想した。「青びかり」は、現実の光景として考えれば、稲妻であるが、空のひび割れのように走る稲妻は恐竜たちの咆哮する恐ろしい白亜期、ジュラ紀の世界をかいま見たことを示している。だが、その恐竜たちも、太陽の光を浴びて輝く聖なる光によって駆逐される。

ここには賢治の心酔していた『法華経』の「如来寿量品」のイメージが投影していると思われる。地上にパラダイスを作る夢、一点の隈もなく輝ける気圏とは、そうしたスケールの大きな夢であらう。ここには光

宮沢賢治「精神歌」の心―「まこと」を求めて「ひかり」の道を

と闇の戦い、聖なるものと修羅の対立、闘争が暗示され、最終的には光が勝利を収めることが希望をもって語られている。

補足しておけば、青空にわたる「青びかり」を解釈するヒントとして「イギリス海岸の歌」(賢治が作詩、作曲したもの。童話にも同名の作品がある)が考えられる。そこに次のような歌詞がある。

「Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

あをじろ日破れ あをじろ日破れ あをじろ日破れに おれのかげ

Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

なみはあをぢめ 支流はそそぎ たしかにここは修羅のなごさ」

Tertiary the younger は地質学の用語で、地球生成の「第三期初期層」(約二千六百万年前から二百万年前という)で、恐竜たちの支配していた白亜紀、ジュラ紀を含む時代であり、Mud-stoneはその時代の「泥岩」である。こうした英語による表現は繰り返されることによって、一種の囃子詞のような働きをもたらすものとなっている。

北上川が豊沢川(花巻)と合流するあたりをかつてそこは海であつた事から、賢治はイギリスのドーバー海峡になぞらえて、「イギリス海岸」と名付けたことはよく知られている。この詩において「あをじろ」く、「日破れ」(普通「干割れ」または「日割れ」と書く)して見えるのは泥岩のひび割れであらう。その泥岩の干割れに賢治は「おれのかげ」即ち潜在する修羅の意識を見た。童話『イギリス海岸』にこのあたりを描写した言葉として次の一節がある。

「日が強く照るときは岩は乾いて真っ白に見え、たて横に走ったひび割れもあり大きな帽子を冠ってその上をうつむいて歩くなら影法師は黒く落ちましたし、全くもうイギリスあたりの白亜の海岸を歩いているよう

な気がするのです。」

この一節と同じ内容を文語詩で次のように詠んでいる。
 「川しろじろとまじはりて、うたかたしげきこのほとり、病だきつかれわ
 が行けば、そらのひかりぞ身を責むる。宿世のくるみはんの毯、干割れ
 て青き泥岩に、はかなきかなやわが影の、卑しき鬼をうつすなり（以下
 略）」

乾燥した泥岩に現れたひび割れに賢治は恐竜時代を連想、そこに映る
 わが影に自分の中に密かに眠っている鬼―修羅の意識を感じ取った。

その泥岩のひび割れは空の稲妻と同じイメージをもつ。空のひび割れ
 が稲妻であり、その稲妻に潜在意識として潜む原始的な修羅の意識を象
 徴したものである。波までも、青ざめて恐竜たちの世界が今、現出す
 る。まさに「修羅のなぎさ」である。

そうした潜在意識に潜む修羅の意識を根底から照らし出すのが「ひか
 り」である。闇は「ひかり」に勝つことが出来ない。「ひかり」は闇を駆
 逐する。聖なる太陽の「ひかり」を浴びて、「ひかり」の子となって生き
 る。働くことはそうした尊い業である。「ひかりの汗」の尊さはそこにあ
 る。ともすればさげすまれ、卑しいものと考えられがちなこと、額
 に汗して働くことの尊さを賢治はここで教えようとした。考えてみれば
 賢治自身職業をもちえぬまま家に寄生するような生活を続ける中で信仰
 を燃やしていたのである。農学校の教師体験は働くことの尊さの発見で
 もあった。

(三)

日は君臨し 玻璃の窓

清澄にして 寂かなり。

さあれまことを求めては

白亜の霧も 浴びぬべし。

(語釈)

○玻璃(はり)……中国語でガラスのことを言う。ここではこの「精神
 歌」が学校で歌われるものであることから考えて教室のガラ
 ス窓をいったものである。

○白亜……泥質の柔らかい石灰岩で、白墨や石灰の原料となる。英語で
 チョーク。「白亜の霧」とは、白墨の粉を洒落ていったもの。

(解説的口語訳)

太陽は神のごとく君臨しています。その光を浴びて、私達の教室のガ
 ラス窓は澄んで静かに光っています。私達はその教室にあって、共に
 「まこと」を求め、ひたむきに歩んでいます。教える先生も教室でチョ
 ークを持って君たちの前で熱弁をふるっています。そのチョークの粉が君
 たちに降りかかることもあるでしょう。それは許して下さい。私達は共
 に、「まこと」を求める同志なのですから。

(解説)

太陽の光を浴びて光る教室のガラス窓。しかし、そこには「まこと」
 を求めて真剣に生きる賢治がいる。授業に打ち込む賢治がいる。その賢
 治の声に耳を傾ける教え子達がいる。校歌は一般に真面目な歌詞を持ち、
 幾分パターン化した、笑いの要素がないものが多い。しかし、この歌の「白
 亜の霧も浴びぬべし」などという表現には、賢治ならではのウィット、
 温かいユーモアが伺われる。しかも、そこに求道精神が連ぬかれている。
 「まこと」こそ賢治の求めてやまないものだった。明るい求道者であつ
 た賢治らしい歌詞である。

瀬川哲男によれば賢治は教室で次のようなことを熱心に説いたとい
 う。「人類の歴史上、最も淋しい恐ろしい時代は、今から約一億年ばかり
 前の爬虫類時代の頃である。その恐ろしい思いは、今我々の身体を構成
 している細胞各は覚えているのだ。人間の細胞核に、人類の歴史の初め

から今までのことを全部覚えていたのだ。今後、我々の世界に幸福ばかりでなく、白亜紀の爬虫類時代の不幸な時代に勝るとも劣らないことが訪れることもある。

爬虫類の時代は、弱肉強食のエゴイズム、修羅の時代である。それを乗り越えて進化してきたのが人類であり、進化の頂上に立つ存在でもある。しかし人間の細胞核―潜在意識にはいまだにそうした修羅、爬虫類時代の記憶が眠っている。それを克服して大いなる宇宙意識をもち「ひかり」の子となり菩薩となること―「修羅の成仏」に賢治自身の生涯の課題であった。そうした理想を教室で語ったようである。

(四)

日は君臨しかがやきの

太陽系は真昼なり。

けはしき旅のなかにして

われらひかりのみちをふむ。

(語釈)

○太陽系……太陽と太陽を巡る惑星、その衛生などの天体の集団、及びそれを包む空間。賢治は今、この地における昼の明るさ、太陽の輝きを太陽系全体の輝き、明るさとして表現している。誇張された、イメージ化された光の、聖なる世界を暗示しているともいえようか。

○旅……人生。人生を旅に喩えるのは芭蕉以来の日本文学の伝統とも言える。賢治の『銀河鉄道の旅』を始め、様々な形で旅する人間を描いている。

(解説的口語訳)

太陽は君臨し、太陽系のなべての世界は真昼の明るいひかりに照らし

宮沢賢治「精神歌」の心―「まこと」を求めて「ひかり」の道を

出されています。その光に照らし出されて、なべてのものが生きるのです。そこでは闇は駆逐され、一点の曇りもなくすべてが照らされています。たとえ人生が険しい、労多い旅であるとしても、私達は光の子として、希望を持って、光のみちを歩み続けようではありませんか。

(解説)

人生は旅であるという。賢治も人生を苦しい旅と考え、自らを旅人として自覚していた。それは「まこと」を求める孤独な旅、友人一人ないさびしい旅でもあった。父を改宗できなかったこと、生涯の友、保阪嘉内と同じ信仰の道を歩めなかったことは、賢治の生涯においておそらく決定的であった。父あるいは嘉内を折伏説得しようとしたその情熱が、詩や童話の創作に対する情熱に転化したともいえる。「折伏」とは、仏教語で悪人、悪法をくじいて屈伏させることをいう言葉で、日蓮によって重視された布教の方法である。父あるいは嘉内を折伏、説得しようとしたことから未知の読者を対象とする新たな「法華文学」＝宗教学の創作へ。そこに賢治の生き方の大きな転換があった。

「けはしき旅」の中にあつて、賢治は希望を持ち続けた。仏の慈悲を信じ、その限らない慈しみに支えられ、その仏のごとく生きることを己に課していた。露骨な宗教用語を使ったり、人に信仰の道を押しつけるようなことはなかったが、宗教的な心を文学として伝えることを己の使命とした。太陽はそのまま、仏でもあり、太陽を感じることは宗教的な心を育むことでもある。賢治はここで宗教的な用語、教義をこえた、誰しもわかる、共感できる自然信仰的な心を歌いあげているようだ。

五 補 足

賢治は大正十三年、花巻農学校の生徒達を引率して北海道へ修学旅行に出発しているが、その復命書に校歌や歌集についての記述がある。その中に「銭函付近……車中に軍人数人あり。何処の生徒かなど問ふ。生

徒等校歌集を贈り順次に各歌を合唱す。客切に悦ぶ」と書かれた一節がある。ここに出てくる「校歌集」は謄写版で賢治が作ったものではないかと佐藤泰平は推測している。この記述は賢治の作詞した校歌が誇りをもって生徒達に歌われていたことを示すものでもある。そこには農学校教師としての賢治の自信と誇りも伺われる。

賢治が農学校の生徒達のために作詞した作品としてこの「精神歌」の他に、「角礫行進歌」「応援歌」「黎明行進歌」の三作品がある。次にこの三曲の歌詞を、解説を添えて紹介しておく。(それぞれの歌の表題の下に括弧書きして原曲を示しておいたが、これは校本宮沢賢治全集による)

(一) 応援歌 (賢治の作詞・作曲)
(a tropical war song modified)

Baleoc Bararage Brando Brando Brando
Lahmetingri calrakanno sanno sanno sanno
Lahmetingri Lamessanno kanno kanno kanno
Dal-dal pietro dal-dal piero

正しいねがいは まことのちから
すすめ すすめ すすめ やぶれ かてよ

(解説) この歌は学校劇『種山ヶ原の夜』の中で主人公の伊藤が「眠さうにうたふ」歌として出てくる。表記は、仮名書きで次のようになって
いる。

「ばるこく ばららげ ぶらんど ぶらんどぶらんど らあめていんぐ
りかるらっさんの さんのさんのさんの さん さん さん さん
るらっさんの かんのかんのかんの
だるだるびいとり だるだるびいり だだしいねがいはまことのちから
すすめすすめ すすめやぶれかてよ」

奇妙奇天烈な、無邪気な遊びめいた言葉は、括弧書きの (a tropical war

song modified)。「熱帯地方の戦いの歌を修飾した歌」という意味から考えて、「土人語」のようなものである。本来なら勇ましく歌われるべき応援歌が眠そうに歌われるというのも面白いし、言葉遊びめいた楽しいユーモアの中にも「正しい願い」を持ってという賢治の教え子に寄せるメッセージが表現されている。生徒間の応援歌であるが、賢治が生徒を応援する歌でもある。

なお、佐藤成はこの歌詞のアルファベットの部分を次のように意識している。

「動感溢れ弦は響く。さう、戦いのバラードを繰り広げよ。剣をみがき、たいまつをかざせ。全身全霊を打ち込み、勝ちどきをあげよ。エネルギーを燃やせ。金銀織りなす収穫の鐘は鳴る。自由と自治と敬愛のいしずえを創造せよ。」この後に『正しい願いは……』が続く。

(二) 角礫行進歌 (原曲はグノー作曲の歌劇「ファウスト」第四幕中の兵士の合唱による)

水霧はそらに鎖し、
落葉松も黒くすがれ、
稜礫の あれつちを、
やぶりてわれらはきたりぬ。

かけすの歌も途絶え、
腐食質はかたく凍ゆ、
角礫のかどごとに
はがねは火花をあげ来し。

(天のひかりは降りも来ず、
天のひかりは注ぎ来ず、
天のひかりは射しも来ず。)

(語釈)

○角礫……コングロメレート conglomerate。直径二ミリ以上の岩石が砂土といっしょになって固まったもの。「稜礫」も同じ。ここでは角礫混じりの荒れ土。

○氷霧……低温のため水蒸気が凝縮して微細な氷の結晶となったもので霧のように立ちこめて視界がきかなくなる。

(意識)

氷霧は空を閉ざさんばかり一面にかかり、落葉松も黒く枯れ、荒れた土地を乗り越えてここまで来た。

カケスの歌もはや聞こえず、腐食質の土地も堅く凍り、石の礫は鍬にあたって火花を上げている。

(太陽の光はまだ降らない、注ぎもしない、射しもしない
そんな暗闇の中を、数々の困難と闘いながら進んでいくのだ。)

(三) 黎明行進歌 (原曲は第一高等学校第十八回記念祭に際しての卒業生からの寄贈歌「紫淡くたそがるる」による)

蛇紋山地じやんざんちの 赤きあかそら、

雲すみやかに過ぎ行て、

夢死とわらはん田園の、

黎明いまは果てんとす。

錆びし五日の 金の鎌、

かの山稜に 落ち行きて、

われらが犁すきの 燦さんてん転と、

朝日の酒は 地に充てり。

起てわが気圏の戦士らよ

あかつきすでに やぶれしを

いま角礫かくれきのあれつちに

リンデの種子をわが播かん。

とりいれの日は遠からず

微風緑樹の 莊嚴と

禾穀かこくの浪は きららかに

歓呼は天も 応へなん。

ふるふ地平の紺の上

広き肩なすはらからよ、

げに辛酸のしろひかり、

になひてともに過ぎ行かん。

(語釈)

○黎明……夜明け。「黎」はウルシの黒さを表す文字で、夜明け前のくらくい空の形容。

○蛇紋山地……蛇紋岩の産出する山地、賢治は北上山地を「蛇紋山地」と呼んでいる。

○リンデ……ドイツ語のリンデンバウムで、セイヨウボダイジュと訳されるが、厳密にいうとボダイジュには①インドボダイジュウ

(釈迦がその下で悟りを開いたと伝えられる) ②シナノキ科

の落葉高木のボダイジュ(仏教寺院に多く植えられている)

③ヨーロッパ原産のセイヨウボダイジュの三種類ある。

小野隆祥はこの言葉に『無量義経』の「善の種子を布いて
功徳の田に遍くし、普く一切をして菩提の萌を發させしむ」

(『宮澤賢治の思索と信仰』)という一節の影響があったので

はないかと推測しているが、「精神歌」における「まことの種」と同様に植物の種を蒔くことに、精神的・宗教的な心を重ねた表現である。「けふ彼岸菩提の種を蒔く日かな」という句があり、「菩提の種」という言葉もある。賢治はこれを知っていて、「リンデの種」と洒落て表現したのであろう。「菩提」は無上の悟り、智慧を意味する。王敏が指摘するようにこれは「仏心」「童心」あるいは「詩心」といつても良いだろう。ちなみに賢治は『注文の多い料理店』の新聞案内において「これは正しいものの種子を有し、その美しい発芽をまつものである」と書いている。ここでわかるように読書も自らの心に種を蒔く仕事であり、作品を書くことは読者にその種を提供することだと、考えていた。聖書においても信仰は、しばしば、「種」に喩えられている。

(意訳)

蛇紋岩の層をなす北上山地、赤い朝焼けの空には、雲も速やかに流れている。昨夜のこともはかない夢と笑おう。今、田園の夜明けの一時も過ぎ去ろうとしている。(難解な歌詞であるが一応仮の訳としておく)

錆びたようにかかる月、金の鎌のように弧を描く五日の月も山の端に沈み、われらの持っている鋤も輝き、酒のように人を酔わせる朝日はまぶしく地を照らしている。

さあ立て、この大気圏宇宙にあつて、農に生き苦難と闘う兵士よ。暗い闇の世界も明けて夜明けの光の世界となった。この石ころ混じりの荒れ土にまことの心をもって、穀物の種を蒔こう。

イネの収穫の日も遠くない。そよ風が吹き、緑の木々でおおわれたこの美しい荘厳なる大地に稲の穂も波打ち、きららかに輝くであろう。実際の喜びは天も祝福するであろう。

ふるえるような青い地平線の上を歩む広い肩持つ、たくましい我らが

同胞よ。しろ光りのような修羅の辛い、苦しい荷を担ってこの人生を共に生きていこうではないか。

(参考文献)

- 『宮沢賢治の音楽』 佐藤泰平
- 『こぼれ話 宮沢賢治』 白藤慈秀
- 『花巻農学校精神歌私感』 瀬川哲男 (『花巻農業高校七十年史』 所収)
- 『教師 宮沢賢治のしごと』 畑山博 小学館
- 『野の教育者・宮沢賢治』 三上満 新日本出版社
- 『賢治の学校』 鳥山敏子 サンマーク出版
- 『賢治の実践教育学白書』 佐藤成 ようけい舎
- 『証言 宮沢賢治先生 イーハトーブ農学校の一五八〇日』 佐藤成 農文協
- 『宮沢賢治の生涯』 「宮沢賢治の会」
- 『謝謝 宮沢賢治の生涯』 王敏 朝日文庫
- 『私の賢治散歩』 菊池忠二
- 『ふれあいの人々 宮沢賢治』 熊谷印刷出版部
- 『宮沢賢治の信仰と思索』 小野隆祥 泰流社
- 『宮沢賢治語彙辞典』 東京書籍